

ケベックのフランス語教科書に反映される
語彙的および統語的特徴

Manuels de français publiés au Québec et
quelques caractéristiques lexicales et syntaxiques
du français québécois oral

近藤野里
KONDO Nori

Résumé

L'objectif de notre étude est de décrire quelques traits régionaux de l'usage oral du français québécois qui sont présentés dans les manuels « Par ici, Méthode de français » (A1/1-2, A2/3-4, B1/5-6). Ces manuels de français langue seconde ont été publiés de 2015 à 2018 au Québec. Comme les auteurs l'affirment dans l'avant-propos de ces manuels (« [...] présenter d'abord les formes (structures syntaxiques, expressions) *les plus utilisées* dans le contexte donné [...] »), nous y rencontrons une abondance de traits linguistiques régionaux. Bien que la norme du français soit présentée, ces manuels insistent également sur l'usage à l'oral au Québec qui représente leur propre standard.

Cet article est divisé en trois parties. Dans la première partie, nous essayons de répondre à la question suivante : quel type de français doit-on traiter dans l'enseignement de français au Québec ? Pour y répondre, dans un premier temps, nous revoyons les deux termes : l'usage et la norme langagiers. Puis, nous examinons la norme et l'usage partagés par les locuteurs québécois afin de constater la nécessité d'apprentissage des variantes régionales dans le contexte en question. Dans la deuxième partie, nous expliquons la particularité de notre corpus, notamment les objectifs présentés par les auteurs de ces manuels et quelques variantes sociolinguistiques expliquées dans les manuels. Dans la troisième partie, en nous basant sur le corpus, nous montrons des variantes régionales propres au Québec à deux niveaux : lexical et syntaxique.

キーワード：ケベック・フランス語、規範、慣用、教科書、第二言語習得
Mots-clés : français québécois, norme, usage, manuels, acquisition langue seconde

1. はじめに

本稿ではカナダのケベック州で出版された非フランス語母語話者を対象とする第二言語（L2）を学習するためのフランス語の教科書をコーパスとして用い、教科書に反映されたケベック・フランス語の語彙および統語的特徴を記述する。教科書をコーパスとして使用する理由は複数ある。まず、教科書は非フランス語母語話者の学習者がフランス語を学ぶために使用することから、学習者によって習得されるべき要素（音声的、形態的、語彙的、統語的、語用論的、社会言語学的）が含まれる。また教科書には基本的にはその言語の規範的な形が反映されることが一般的である。よって、教科書には教科書作成者が学習者に習得してほしいと望む要素が反映されていることが期待できるだろう。ところで、本研究がコーパスとして用いるケベック州で出版された教科書 *Par ici, Méthode de français* では、特に音声教材に、話し言葉で非常によく使用される形が、音声レベル、語彙レベル、統語レベルにおいて観察される。

本研究では、まずフランス語の規範・慣用についてこれまでに言われてきたことを概観することから始める。分析では、本研究のコーパスとして使用する教科書の音声教材において観察される、ケベック・フランス語の語彙的特徴、統語的特徴（主に全体疑問文の語順）を明らかにする。

2. 第二言語教育におけるフランス語の慣用と規範

第二言語教育において、言語変異を教えることはどれほど重視されるべきなのだろうか。また、ケベック州というコンテキストでのフランス語教育では、どのようなフランス語が教えられるべきなのだろうか。目標言語の学習のために作成された教科書では、伝統文法（規範文法）が説明されることが一般的であろう。言語共同体の中で「正しい」と判断された「規範」が反映される一方で、規範からは少々外れるものの、その言語共同体で使用される「慣用」（言語変異を含む）は反映されるのだろうか、または反映されるべきなのだろうか。以下では、まず慣用と規範の定義を提示する。また、ケベック州ではフランス語の「どの」規範を採用するかという問いに対する論争が

少なからずあるため、ケベック・フランス語の規範をめぐる議論について概観する。終わりに、教科書に言語変異を反映させる意義について考察する。

2.1. 慣用と規範

エウジェニオ・コセリウ (Coseriu) (1973) に従えば、慣用とは、「正誤の基準や、表現されたものについて主観的評価の基準によって確立されたり課されたりする規範ではなく、ある言語内に客観的に確認される」ものである¹。慣用が複数あるとすれば、それらの慣用に対して社会的な価値判断がなされるのが常であろう。

一方、規範は実際の慣用から社会的に「好ましい」と判断され、さらにコード化（成文化）されたものであると言えよう。規範とは、常に社会の構成員である特定の話者の主観的判断によって選択されるものである。複数の慣用の間で葛藤が生じるようなことがあれば、解決のために言語規範が呈される。川口裕司 (2015: 30) は、規範は「いわば慣用間の競合関係を解消するための伝家の宝刀」であると表現しているが、規範が設定されるということは、誰かによって競合する慣用から一つの慣用が選択され、さらには明文化されるという、非常に主観的な行為が行われた結果であることを意味する。

2.2. ケベック・フランス語の規範

ケベック・フランス語の規範についてはこれまで様々な議論が行われてきた。(1) ケベック州で規範とするのは国際的なフランス語なのか、(2) それともケベック州で話されるフランス語なのか、という議論である (Bigot, 2011: 2)。

(1) に関しては、フランス語局 (Office de la langue française, OLF) は 1965 年にケベック州で書かれる・話されるフランス語の規範に関する文書を発行した。その最初の定義によると「パリ、ジュネーブ、ブリュッセル、ダカル、そしてフランス語を話す大都市において支配的であるフランス語とほとんど全体的に合致するもの²」であり、特に形態的および統語的側面では変異は存在しないとされている (Bigot, 2011: 2)。またフランス語審議会の 2007 年発行の報告書では、「教えることが可能な唯一のフランス語は国際的な水準でのケベック州のフランス語である。これは、話し言葉か書き言葉かに応じて、別様に定義されるだろう。オフィシャルなレジスター³におけるケベックのフランス語は国際的なフランス語に一致するものである⁴」というような定義が示されている (Bigot, 2011: 3)。つまり、ケベック・フランス語の規範は

国際的なフランス語と一致しているという意見である。

他方で(2)に関して言えば、ジュアル論争⁵以来、教員たちが学校で教えるべきフランス語の規範をめぐる意見が分かれていた。1977年にケベックのフランス語教員協会(Association québécoise des professeurs de français)によって以下のような解決策を提示された。

« Que la norme du français dans les écoles du Québec soit le français standard d'ici. Le français standard d'ici est la variété de français socialement valorisée que la majorité des Québécois francophones tendent à utiliser dans les situations de communication formelle. » (「ケベック州の学校でのフランス語の規範は我々の標準フランス語であろう。ここでの標準フランス語はフランコフォンのケベック人の大多数がフォーマルなコミュニケーションの状況で使用する傾向にある、社会的に高く評価されたフランス語の変種である。」、筆者訳) (Conseil de la langue française, 1990: 31)

しかし、コード化されたケベック州独自の標準的フランス語があるわけではなく、協会の提言は問題提起の域を出なかった(矢頭典枝, 2005: 345)。その一方、語彙レベルにおいては規範化が進んだことは間違いない。専門用語の規範化とともに、一般用語に関する「ケベシズム」⁶がケベック・フランス語の規範として容認されるべきであるとして、ある程度の意見の一致がある(矢頭, 2005: 345)。発音レベルにおいては、ケベック・フランス語独自の標準性が存在しているといえる。例えば、狭母音(/i, y/)が後続する場合に/t/および/d/が破擦化して[ts], [dz]になる場合や、長母音(例:fête [fe:t])などはケベック・フランス語の標準的な発音である。統語レベルについては、ダヴィ・ピゴ(Davy Bigot)(2011)の研究を参考にする。Bigot(2011)はケベックのエリート層のインタビュー番組をコーパスとして、フォーマルなコミュニケーションが期待される状況で、彼らがどのようなフランス語を話すのか、について調査を行った⁷。このコーパスで最も出現頻度が高い変異は、単純未来の代わりとしての近接未来の使用(78,9%)、複数形の名詞句が続く場合における*c'est des*の使用(60,4%)である。その一方で、他の変異の頻度は低く、国際的なレベルと同様の標準的な形を使用する傾向が観察されたという。

以上のことから、標準的なケベック・フランス語に関して、少なくとも発

音と語彙レベルではある程度のケベック特有の特徴があるものの、統語レベルでは標準的なケベック・フランス語は国際的なフランス語の規範とほとんど変わらないと認識されているといえる。

2.3. 教科書における規範と言語変異

教科書には基本的に規範文法が提示されるのが一般的である。その理由として、その言語共同体で正しいと判断されている形を習うことが望ましいと考えられていることが挙げられるだろう。また、もし複数の慣用を教科書に提示するのであれば、母語話者がその慣用に下す社会的判断に関する情報もそれぞれに付け加えて教える必要もあるだろう。そうした場合に、学習者が処理する情報が多くなってしまいう問題点がある。例えば、フランス語の話し言葉では否定辞の *ne-pas* のうち、*ne* が脱落する頻度は非常に高い。ただし、脱落した形が、少なくともフランスや日本で出版された教科書に確認されることは、ほとんどない。規範的な形は *ne-pas* という2つの要素が動詞を挟んで表れるものであるが、仮に *ne* の脱落に言及した場合には、いつ脱落するのかということを明示的に説明する必要が出てくる。しかし、脱落について単純明快に説明するということは、簡単なことではない（川口, 2015 : 31-35）。

しかし、学習者に慣用を教えることを控えるならば、教室という人工的な空間から学習者が物理的に離れた際に、学習した言語が日常的に使用できないという問題が起こりうる。例えば、モンリオールで英語・フランス語のバイリンガル教育（イマージョン教育）を受けた英語母語話者の例がある。長期間を通して学校で習得したフランス語が、彼らの生活圏であるモンリオールでさえ通じない・聞き取れないという問題がジュリー・オジェ（Julie Auger）（2002 : 83-84）によって指摘されている。これは学校で習ったフランス語（School French）と教室の外で話されるフランス語（Street French）の違いが非常に大きいためである。学校で習うフランス語はいわゆる標準的フランス語であり、これが国際的なフランス語であったとしても、発音と語彙レベルにおけるケベック特有の言語変異をある程度学習しなければ、母語話者が話す自然なフランス語を理解できるわけではない。そのような理由もあり、ケベック州のイマージョン教育で使用するために作成された教科書には、ある程度の変異が反映されている（Auger, 2002）。

言語変異を学習者に明示的に教えることは、学習者にとって学習すべき

要素が増えるという悩ましい点もちろんある。とはいえ、教室の外でフランス語を使用するという現実的な側面を考慮すると、その必要性が高いことは否定できない。本研究がコーパスとして使用する教科書の作成者たちは、後者の側面を重視しているわけであるが、ケベック特有のフランス語のどのような特徴が、どれほどの量で教科書に反映されているのかを観察することが本研究の意図でもある。

3. コーパスについて

本研究で使用する *Par ici Méthode de français* は3つのレベル (A1, A2, B1) の教科書シリーズである。それぞれ、2015年 (A2)、2016年 (B1)、2017年 (A1) にケベック州モンリオールの出版社 Les Éditions MD 社から出版された。本研究ではこの教科書付属の音声教材 (CD) とそれを転写した Word ファイルをコーパスとして使用する。

3.1. 序文での教科書の意図の説明

教科書の序文では、この教科書の作成に関する動機や狙いについて書かれている。重要だと思われる箇所を以下に引用する。

- (1) « **Par ici** est une méthode de français langue seconde destinée aux adultes désirant apprendre la langue française telle qu'elle est parlée au Québec (...) Cette méthode peut aussi convenir à l'apprentissage ou à l'enseignement du français dans une autre province canadienne, ou à toute personne qui souhaite apprendre le français dans un contexte nord-américain. (p. 2) » (「*Par ici* はケベック州で話されるフランス語を学びたいと考える大人の学習者に向けられた第二言語としてのフランス語の教科書である。この教科書はまた、他のカナダの州でのフランス語学習および教授、もしくは北アメリカというコンテキストにおいてフランス語を学びたいと望むすべての人に適している。」、筆者訳)
- (2) « Le premier principe pédagogique appliqué (...) est celui de la préséance de l'oral (compréhension et production) sur l'écrit. (...) Le deuxième principe pédagogique est de présenter d'abord les formes (structures syntaxiques, expressions) **les plus utilisées** (...) avant les formes plus recherchées ou inusitées. Ce choix pédagogique favorise la compréhension dans un grand nombre de situations de la vie quotidienne (plutôt que l'acquisition de formes écrites peu susceptibles d'être employées à l'oral),

ainsi que l'acquisition d'une fluidité dans l'interaction orale. » (「採用された1つ目の教育的原則は、書き言葉に対して、話し言葉（理解と産出）を優先することである。2つ目の教育原則はまず気取った形もしくは使われていない形⁸よりも最も使用される形（統語構造、表現）を提示することである。この教育的選択は日常生活における多くの状況においての理解（話し言葉では使用されないであろう書き言葉の形の獲得よりも）、そして口頭でのやりとりの流暢さの獲得を促進するものである。」、筆者訳、強調筆者）

(1)の説明からは、この教科書が主にケベック州で、さらに広くとらえるとカナダで、そして北米でフランス語を学習する人々に向けて作成されていることが明白である。(2)の説明に関して興味深い点は、この教科書では書き言葉よりも話し言葉に焦点が当てられ、さらに話し言葉において頻度が高い形の習得が重視されていることである。このような説明から、この教科書にはカナダのフランス語の標準的な慣用も反映されていることが明らかである。さらに、話し言葉に照準が置かれていることから、書き言葉がそのまま話されるというのではなく、インフォーマルなタイプのフランス語の特徴も反映されていると解釈することができる。

3.2. 変異に関する説明

特にA1とA2の教科書の巻末資料にはリエゾンやエリジオンおよび無音の*e*に関する説明と並列しつつ、発音レベルでの変異に関する解説および練習問題が提示される。ただし、発話のレジスターによる社会言語学的変異であるというような説明は見られない。以下に変異に関する説明の一部を紹介する。

- (a) 代名詞 *je* の発音 (A1 と A2) : 例えば、*je suis* ([ʒəsɥi]) はしばしば *chui* ([ʃɥi]) もしくは *chu* [ʃy] と発音されるという説明に加えて、*je* が子音で始まる動詞に前置する場合の *je* の *e* が省略された発音形 ([ʒ]) に関する説明がある (例 : *je lave, je lis, je mange*)。
- (b) *je vais* の発音 (A2) : *je vais* の発音について3つの発音形 (*je vais* [ʒəvɛ], *j'vais* [ʒvɛ], *j'va* [ʒva]) が紹介されている。特に *j'va* [ʒva] の発音はケベック・フランス語に特有な発音である。
- (c) *il y a* の発音 (A2) : *il y a* には2種類の発音 (*il y a* [il/i/a] と *ya* [ja]) が提

示されている。また、*ya* [ja] の発音の頻度が高いことが明記されている。

(d) 代名詞 *tu*, *elle*, *il* (A2) : まず、*tu* については [ty] と母音が省略された [t] の2つの発音について説明がある。*tu* に後続する語が母音で始まる場合には、母音が省略されて « *T'aimes la poutine ?* » のようになる。次に、*elle* については *elle* [ɛl], *al* [al], *a* [a], *é* [e:] の4つの発音が提示されている。*elle* に後続する語が母音で始まる場合には基本的には *al* [al] (« *al achète de la viande.* » = *elle achète de la viande.*) と発音されるが、後続する動詞が *est* の場合には *é* [e:] (« *é dans ta classe.* » = *elle est dans ta classe.*) と発音されることが補足されている。また、後続する語が子音で始まる場合には *a* [a] (« *a comprend les explications.* » = *elle comprend les explications.*) が発音されると説明されている。*il* については、*il* [il], *y* [j], *i* [i] の3つの発音があり、母音の前では *y* [j] (« *y écrit un message.* » = *il écrit un message.*) が、子音の前では *i* [i] (« *i travaille le mardi.* » = *il travaille le mardi.*) が発音されるという補足がある。ところで、三人称複数形の人称代名詞 *ils*, *elles* の発音については説明がない。ただし、音声教材を実際に聞くと、*ils* については [I] の脱落が頻繁に観察される。

(e) 否定辞 *plus* の発音 (A2) : 否定辞 *plus* には2つの発音 ([plu], [py]) があることが明記され、しばしば [pu] (« *on n'en a pu.* » = *on n'en a plus.*) と発音されると説明がある。

4. 分析

本研究では、教科書に反映される語彙的特徴と統語的特徴についてコーパスを基に分析を行う。ケベック・フランス語の語彙的特徴に関しては、主にアングリシズム、アンチ・アングリシズム、アルカイズム、その他のケベック・フランス語に特有な語彙について取り上げる。そして統語的特徴については、主に全体疑問文の語順に注目する。

4.1. 語彙的特徴

地理的な変異形のうち、最も多様な姿を提示するのは語彙的変異である。ケベック特有の語彙的特徴について、矢頭 (2005 : 341-343) は以下の4つの分類について、説明している。

(1) アルカイズム : 17・18世紀のヌーヴェル・フランス植民地時代の語彙が継承され、現代のフランスでは古語としてみなされるもの。(例 :

poudrerie (吹雪)、*déjeuner* (朝食)、*dîner* (昼食)、*souper* (夕食) など)

- (2) アングリシズム：英語からの借用であり、語彙・意味レベルにとどまらず、形態、統語レベルに至るまで幅広い。単純借用（例：*boss* (ボス)、*fun* (楽しい)、*chum* (恋人)、*tire* (タイヤ)、*mitaine* (ミトン))、フランス語の接尾辞の付加（例：*watcher*、*checker* など）、英語の語や慣用句のフランス語への直訳といった干涉（例：*bienvenue* (どういたしまして)、*réaliser* (気づく) など) のように多岐にわたる。
- (3) アンチ・アングリシズム：既に定着したアングリシズムに対抗するための英語からフランス語への翻訳借用。（例：*maïs-éclatés* (*popcorn*)、*stationnement* (*parking*)、*fin de semaine* (*weekend*) など）
- (4) その他の語彙の特徴：ケベックの特殊性を反映する語彙は、風習、服装、動植物、食文化などの分野でケベックに特有なもの（例：*cabane à sucre* (メープルシロップ小屋)、もしくはフランスのフランス語とは異なるが、ケベックでは幅広く使われている語（例：*dépanneur* (コンビニエンスストア)、*baccalauréat* (学士号) など)。

教科書コーパスに観察されたケベック・フランス語に特有な語彙は多岐にわたった。例えば、アングリシズムにあたる語彙に関しては、*bye* (15)、*mitaine* (4)、*chum* (4)、*gym* (3)、*muffin* (3)、*fun* (2)、*bienvenue* (2)、*bacon* (1)、*boss* (1)、*brownies* (1)、*business* (1)、*cheddar* (1)、*condo* (1)、*enywèye* (1)、*ouch* (1)、*party* (1) といった例が観察された（カッコ内の数字は出現回数を意味する）。

最も頻度が高い語彙は間投詞の *bye* であり、コーパス全体で 15 例観察された。次に例数が多かったのはミトンを表す *mitaine*、男性の恋人を表す *chum* という語彙であり、4 例ずつ観察された。また体育館という意味での *gym* やお菓子の *muffin* などは 3 例ずつ観察された。*fun* は 2 例観察され、どちらも « C'est vraiment le *fun*. » という表現である。その他の例は 1 例ずつ観察された。

アンチ・アングリシズムの例としては、例えばポップコーンという意味で *maïs-éclatés* ではなく、*maïs soufflé* という語彙が使用されていた。また、英語の *dip* (パン・野菜などをひたして食べるクリーム状の液体の意) を翻訳した *trempe* (*tremper* 「浸す」から派生) という語が 2 例観察された。

その他に観察された主にケベック・フランス語に特徴的な語彙の一部を以下の表に提示する。

表 1：コーパスで観察された語彙の例⁹

① 形容詞	<i>plate</i> (2), <i>tanné</i> (4), <i>tannant</i> (1), <i>quétaine</i> (1)
② 副詞	<i>présentement</i> (6), <i>pantoute</i> (1)
③ 名詞	<ul style="list-style-type: none"> • 食に関する語：<i>déjeuner</i> (3), <i>diner</i> (1), <i>souper</i> (8), <i>pain doré</i> (1), <i>crème glacée</i> (1), <i>beigne</i> (2), <i>poutine</i> (2), <i>sirop d'érable</i> (1) • 教育に関する語：<i>bac</i> (5), <i>cégép</i> (4), <i>maitrise</i> (2) • 服飾に関する語：<i>tuque</i> (6), <i>soulier</i> (4), <i>chandail</i> (3), <i>foulard</i> (3), <i>espadrille</i> (1), <i>gougoune</i> (1) • 場所 (店) に関する語：<i>buanderie</i> (2), <i>dépanneur</i> (1) • お金に関する語：<i>dollar</i> (2), <i>cent</i> (1), <i>piasse</i> (1) • その他：<i>corridor</i> (14), <i>auto</i> (6), <i>courriel</i> (6), <i>cellulaire</i> (4), 5 à 7 (3), <i>babillard</i> (1), <i>char</i> (1), <i>poudrerie</i> (1), <i>machines distributrices</i> (1), <i>blonde</i> (1)
④ 動詞	<i>magasiner</i> (4), <i>souper</i> (5), <i>diner</i> (4), <i>déjeuner</i> (2), <i>jaser</i> (1), <i>barrer</i> (1),
⑤ その他の表現	<i>la fin de semaine</i> (7), <i>à tantôt</i> (4), <i>faire de la fièvre</i> (3), <i>Excusez</i> (2), <i>être dans le jus</i> (1), <i>Mets-en</i> (1), <i>tu es vraiment fine</i> (1)

上の表 1 を見ると、語彙によって出現頻度が高いものから、1 回のみ使用されているものまで様々である。この出現頻度が、実際の話し言葉での使用頻度と一致することはないはずだが、それでも出現頻度が高い語彙は教科書のあらゆる場面設定で何度も使用されていることを意味するため、実際のケベック・フランス語でもよく使用されるとも考えられる。

フランスでも使用される語が、ケベック州では違う意味で使用される語には、例えば *espadrille* (スニーカーの意)、*foulard* (マフラーの意)、*bac* (大学の学部課程を示す)、*dépanneur* (コンビニエンスストアの意) などがある。また、アルカイズムである、*poudrerie* (吹雪)、*déjeuner* (朝食の意)、*diner* (昼食の意) も観察された。

Auger (2002 : 88) によるイマージョン教育で使用される初等教育および中等教育の教科書の分析において確認されなかった語彙および表現が、本コーパスでは観察された例がいくつかある。それらは、*plate* (= *ennuyant*)、*c'est le fun* (= *on s'amuse bien, c'est super...*)、*piasse* (= *dollar*)、*char* (= *voiture, auto(mobile)*) などであり、これらは口語的な語彙であるといえる。

ページ数が限られるため、全ての語彙についての解説を加えることはここでは控えるが、「車」を指す 3 つの語彙 *voiture*、*auto*、*char* について使用頻度を比較しつつ解説したい。

表2：車を意味する語彙

「車」	<i>voiture</i>	<i>auto</i>	<i>char</i>
出現頻度	6 例	6 例	1 例

上の表を見ると、コーパス内では車を意味する語彙の中で標準的な語彙である *voiture* が 6 回、*automobile* の略である *auto* が 6 回、口語的な語彙である *char* が 1 回、それぞれ使用されていることがわかる。これらの語の出現頻度を比較すると、*voiture* および *auto* は頻度が高いことから標準的な語彙であり、*char* は標準的ではないということが暗示されていると解釈できる。

本コーパスには、アルカイズム、アングリシズム、アンチ・アングリシズム、そしてその他のケベックに特有な語彙が含まれた。語彙の出現頻度も高いものから低いものまであり、また、口語的な語彙（例：*char*）なども少数ではあるが、観察された。

4.2. 統語的特徴としての全体疑問文の語順

統語レベルにおいて Bigot (2011) が対象にした統語の変異のほとんどは本コーパスでは観察されない。Bigot (2011) のコーパスでは頻度が高いと言われている *c'est des* のような連辞も本コーパスでは確認されない。ただし、疑問文の変異については興味深い事例が観察されたといえる。ここでは特に全体疑問文の語順についての分析を提示する。

全体疑問文とは、基本的には *oui*（はい）もしくは *non*（いいえ）で答えられるものを指す。コーパスでは 4 種類の全体疑問文のタイプが観察された。

- (1) 肯定文の文末のイントネーションが上昇するタイプ（イントネーション型）
例：*C'est la première fois que vous venez dans la région ?* (B1)
- (2) *est-ce que* が付加されるタイプ（*est-ce que* 型）
例：*Excusez-moi, est-ce qu'il y a des machines distributrices ?* (A1)
- (3) 主語と動詞が倒置されるタイプ（倒置型）
例：*Pourriez-vous reporter mon rendez-vous ?* (B1)
- (4) 疑問文マーカの *-tu* が付加されるタイプ（疑問文マーカ型）
例：*Il joue-tu de la guitare ?* (A1)

(1)~(3) はフランス語の教科書で基本的に教えられるものであり、標準的な疑

問文の形である。ただし(4)の疑問文マーカー型については、これはケベック・フランス語に特有な慣用を反映させたものである。以下の表では、(1)~(4)のそれぞれの全体疑問文の種類が教科書全体でどのような頻度で観察されたのかについて提示する。

表3：全体疑問文の種類とその頻度

疑問文のタイプ	(1) イントネーション型	(2) <i>est-ce que</i> 型	(3) 倒置型	(4) 疑問文マーカー型	Total
例数	140	95	144	7	386
全体に占める割合	36.27%	24.61%	37.31%	1.81%	100%

表3を見ると、コーパスでは386例の全体疑問文が観察され、特に頻度が高い2つの疑問文型は(1)イントネーション型(36.27%、140例/386例)と(3)倒置型(37.31%、144例/386例)である。倒置型の頻度が高いことはこのコーパスの特徴ともいえる。また、(4)疑問文マーカー型も7例と数は少ないがコーパスにおいて観察された。以下では、特に(3)倒置型と(4)疑問文マーカー型について考察する。

4.2.1. 倒置型

倒置型の頻度は *vous* (56.94%、82例/144例)、*tu* (40.28%、58例/144例)、*je* (2.78%、4例/144例)の順に、人称代名詞の種類に応じて異なっている。その他の人称代名詞(*il, ils, elle, elles*)を主語にもつ倒置型の疑問文が観察されないことは興味深い。また、倒置疑問文はフランスのフランス語では丁寧さを示すために用いられることがある一方、本コーパスでは親しい間柄の相手に対して使用される人称代名詞 *tu* での倒置疑問文の生起数が多いことは、ケベック州では必ずしも倒置疑問文が丁寧な形であるわけではないことを暗示する。仮に、ケベックで話される実際のフランス語で *tu* の倒置疑問文の頻度が高いのであれば、これはフランスのフランス語との違いであり、ケベック・フランス語の特徴ともいえる。ただし、これは実際の話し言葉コーパスに基づいた観察および分析によって、主張されるべきである。

また、倒置がどのような動詞とともに生起しやすいのかを確認すると、最も倒置での生起数が高い動詞は *pouvoir* (47例/144例)で、次に生起数が高

い動詞は *avoir* (43 例 / 144 例) である。つまり、特定の動詞が用いられる際に倒置が起こりやすく、チャンク (塊) で記憶されているために、定型表現のように使用されていることが考えられる。

4.2.2. 疑問文マーカー型

疑問文マーカーの *-tu* が付加された例は 7 例観察された。以下に例を提示する。

Il joue-tu de la guitare ? (A1, p. 76)

Voyons, ils vont-tu décrocher ? (B1, p. 93)

On va-tu dehors ? (A2, p. 104)

Tu travailles-tu la fin de semaine ? (A1, p. 76)

Tu bois-tu du vin au souper ? (A1, p. 76)

Tu joues-tu aux cartes ? (A1, p. 77)

Tu bois-tu de la bière ? (A1, p. 77)

教科書 A1 (Episode 9, p. 76) には、この疑問文マーカーの *-tu* に関して、「インフォーマルな状況では *tu* を使用することができる。もし動詞が *nous* または *vous* で活用される場合には疑問の *tu* は使用されない。」と説明がある。確かに、例文ではこの *-tu* が付加されているのは主語が *il, ils, on, tu* である文に限られる。また、興味深いことに、このタイプの疑問文は最もレベルが低い A1 の教科書でも導入されている。初級学習者が学習する項目として *-tu* が取り上げられていることは、非常に画期的だともいえる。この疑問文マーカーの *-tu* が本コースの全体疑問文の総数に占める割合は低いものの、この疑問文タイプがケベックのフランス語の話し言葉においては日常的に用いられているはずである。しかし、口語的な特徴が強い形であることから頻度を低く提示している教科書作成者の意図が想定される。

5. 終わりに

本稿では、ケベック州で出版されたフランス語の教科書をコースとして用い、教科書に反映された語彙のおよび統語的特徴を記述した。この教科書には、規範だけでなく、ケベック・フランス語に特有な口語的な慣用が反映されていることが具体的に明らかになった。語彙レベルでは、アングリシズム、アンチ・アングリシズム、アルカイズム、その他のケベックに特有な

語彙などが全体的に確認され、さらに、ケベック州で標準的に使用される語彙から、口語的な語彙まで幅広く観察された。また統語レベルでは、ケベック・フランス語では倒置疑問文が豊富に含まれること、この倒置疑問文が特定の動詞で使用される傾向が示唆された。そして、疑問文マーカーの *-tu* を含む疑問文も少数ながら観察された。しかし、他の3つの疑問文タイプと比較すると、*-tu* を含む疑問文は口語的な特徴が強い形であることから教科書における使用頻度が低いといえる。

規範的ではない慣用を教科書に反映することは、Auger (2002) が主張しているように、学校で習ったフランス語と教室の外で話されるフランス語との間のギャップを少しでも埋めるための試みである。そのような場合に、ケベック・フランス語の特徴を、どのように教科書に反映できるのかについて、本稿では一つの教科書を例に明示した。また、この教科書は大人の移民のフランス語学習者も対象としている。そのような学習者が、現実的にケベック州でフランス語話者として生活していく必要にせまられていると考えれば、規範と同時に日常生活において使用される形を学習することは重要である。

本稿では、音声的特徴や地域的特徴以外での社会言語学的特徴（例えば、音の脱落）については扱わなかったため、これらについては稿を改めて論じる。

(こんどう のり 名古屋外国語大学)

注

- 1 邦訳 p.74 を参照。
- 2 Bigot (2011 : 2) を参照。« [celle-ci doit] coïncider à peu près entièrement avec celle qui prévaut à Paris, Genève, Bruxelles, Dakar et dans toutes les grandes villes d'expression française » (Ministère des Affaires culturelles du Québec, 1965 : 6)
- 3 レジスターとは言語使用の文脈（例えば、特定の社会的場面）による言語変種の一つである。
- 4 « [...] le seul français qui peut être enseigné est un français national, *de niveau international*, qui peut être défini différemment, selon qu'il s'agit de l'oral ou de l'écrit. Le français d'ici, de registre « officiel », correspond à ce français international » (Conseil supérieur de la langue française, 2007 : 2) この引用の« un français national »はケベック州のフランス語と訳した。
- 5 矢頭 (2005 : 344) によれば、1960 年年代以降のフランス語局とエリート層によ

るケベック・フランス語の規範化に対して、作家、詩人、歌手など芸術に関わる人々の反発があった。ジュアル肯定派と否定派の確執が1970年代以降も続き、ついには公用語法が制定された1974年に反ジュアルの立場をとる報告書が発表された。

- 6 例えば、ケベックの特殊性を反映する語、フランスのフランス語とは異なるがケベックでは広く使われている語、アルカイズム、アングリシズム、アンチ・アングリシズムであっても、ケベックで定着している語がそれにあたる(矢頭, 2005: 345)。ただし、Remysen (2009)によると、ケベシズムの用語としての定義や使われ方は一様ではないようである。
- 7 Bigot (2011) は発音レベルでの変異についても調査項目に入れている。それらは、*je vais* の発音、動詞 *faire* の過去分詞 *fait* の発音、*tout/tous* の発音、指示形容詞 *ce* および *cet/cette* の発音などである。統語レベルでの変異については、二重否定 (*il y a pas personne/ rien*)、接続詞のあとの *que* の挿入 (*quand que je rentre chez moi*)、関係代名詞 *dont* の代わりに *que* の使用 (*C'est la personne que je parlais*)、複合過去における助動詞 *avoir* の使用 (*Elle a passé par Montréal*)、*si* に続く条件法の使用 (*si j'aurais fait mon travail*)、補足節や間接疑問文 (*je sais pas qu'est-ce que je vais faire, je me demande qu'est-ce que je vais faire*)、全体疑問文 (*Tu y vas-tu ? / Tu y vas ?*) や部分疑問文 (*Que c'est que tu en penses ? / Que c'est que c'est que t'en penses ? / Qu'est-ce t'en penses ?*) などである。
- 8 « *inusitées* » は「使われていない、廃れた」という意味であるが、この文脈での意味は「廃れた」ではなく、特に話し言葉においては日常的に「使用されていない」形という意味であると解釈した。
- 9 コーパスとして使用した教科書では、*diner, déjeuner, maîtrise* はアクセントコンプレックスがついていない綴り字が採用されている。ケベック・フランス語局 (Office québécois de la langue française, OQLF) のHPでは、古い綴り字も、新しい綴り字もどちらも間違っただけのものではないと明言されている。アクセントコンプレックスの項目については以下のケベック・フランス語局のウェブページを参照のこと。http://bdl.oqlf.gouv.qc.ca/bdl/gabarit_bdl.asp?id=3166 (最終アクセス日: 2019年5月9日)

参考文献

- Auger, J. (2002), French Immersion in Montreal: Pedagogical Norm and Functional Competence, *Pedagogical Norms for Second and Foreign Language Learning and Teaching*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins, p. 81-101.
- Bigot, D. (2011), De la norme grammaticale du français parlé au Québec. *Arborescences* :

- revue d'études françaises*. 1, pp. 1-18. <https://www.erudit.org/revue/arbo/2011/v/n1/1001939ar.pdf> (最終アクセス日: 2019年5月11日)
- Conseil de la langue française. (1990), *L'aménagement de la langue : pour une description du français québécois, (Rapport et Avis au Ministère responsable de l'application de la Charte de la langue française)*, Québec, Les Publications du Québec.
- Coseriu, E. (1973), *Sistema norma y habla, Teoria bel lenguaje y lingüística general*, Madrid : Gredos. 邦訳「言語体系・言語慣用・言」『コセリウ言語学選集 2 言語体系』1981年 原誠・上田博人訳 三修社 3～95頁。
- Desjardin, N., R. Sauvé & M. Usereau. (2015), *Par ici, Méthode de français, A2*. Montréal, Edition Marcel Didier.
- Desjardin, N., D. Proulx & R. Sauvé. (2016), *Par ici, Méthode de français, B1*. Montréal, Edition Marcel Didier.
- Desjardin, N. (2017), *Par ici, Méthode de français, A1*. Montréal, Edition Marcel Didier.
- Remysen, W. (2009), L'emploi des termes *canadianisme* et *québécoisme* dans les chroniques de langage canadiennes-françaises. In : France Martineau, Raymond Mougéon, Terry Nadasdi & Mireille Tremblay (eds), *Le français d'ici : études linguistiques et sociolinguistiques sur la variation du français au Québec et en Ontario*. Toronto, Editions du GREF, pp. 207-231.
- 川口裕司 (2000) 「言語にとって規範とは何か」『語学研究所論集』第7号 49～73頁 東京外国語大学。
- (2015) 「TUFS モジュールと言語変異」『グローバル・コミュニケーション研究』第2号 19～41頁 神田外国語大学。
- 矢頭典枝 (2005) 「ケベック・フランス語の特殊性と規範化」『フランス語を探る—フランス語学の諸問題 III』338～349頁 三修社。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 (若手研究) 研究課題 18K12473 から助成を受けたものである。